

国語教育論叢 第十四号 抜刷

島根大学教育学部国文学会 二〇〇五年三月三十一日発行

# 浮舟の出家と瀬戸内寂聴

——小説「髪」に着目して——

呉 羽 長

## 浮舟の出家と瀬戸内寂聴

——小説「髪」に着目して——

### 一『女人源氏物語』と瀬戸内訳『源氏物語』

瀬戸内寂聴は、『女人源氏物語』の執筆（昭和63・11～平成元・8、小学館）を経て、平成八年から同十年の間に、原文記述にはほ忠実な『源氏物語』の現代語訳を行っている（平成8・12～10・4、講談社）。

『女人源氏物語』は光源氏あるいは宇治十帖の薫などと恋を演ずる女君一人一人の心の内に立ち入って女君の思いを独白の形をとって描くものであった。ここでは『源氏物語』の筋立てを生かしながらそれぞれの女君が瀬戸内の心性を背負い、瀬戸内の深い共感により造型されている。瀬戸内はこの創作を通して、『源氏物語』で作者が描こうとしたものは絶対者源氏の姿でなく、源氏を愛した女性たちの哀切な出家、哀れな死であるという読みを強くしているが、こうした読みを含めて彼女が『源氏物語』において捉えた論理（源氏をめぐる女性たち、特に「乱調」を演ずる女性の思いの深長さ、出家してい

く女性への仏の慈悲のまなざしの存在など）が、女君の造型の中に生かされているといえる。

『女人源氏物語』の原典離れに対し、平成十年完結の『源氏物語』現代語訳は原典世界への回帰といえる。この『源氏』訳では、先行する現代語訳や注釈書を丁寧に踏まえつつ、原典のそれぞれの文章・語句を尊重して現代文に変えられており、その際長い原文を二つなり三つなりに分けることにより、主語述語が照応したわかりやすい文章となっている。文末が「です・ます」体で読者に訴える力を強めている点も見逃せない。用語も現代にふさわしいものを使用し、「現代の日常にも連続する等身大の恋愛や人生の描かれる身近な作品としての印象を醸し出す」ことに成功している。このような訳出の中で、原典の内容に書き加えも行われるが、それは文章単位の大きなものではなく、仏教用語を含め説明が必要などころなど原典の意味内容を明確にするため、句単位での加筆が目立つ。ただし説明のためばかりでなく、訳者の思

呉羽 長

い入れが現れる場合がある。

瀬戸内がこうした形で逐語訳を行ったのは、『女人源氏物語』の創作を通じて発見したとする『源氏物語』の論理を、今度は『源氏物語』本文に近づくことで確認しつつ補強しようとした故と解することができる<sup>③</sup>。

しかし瀬戸内訳は右のように原典世界への寄り添いとして意味づけられるにとどまるものではない。この訳の後、瀬戸内は小説「髪」を執筆している（平成11・10、『新潮』掲載、後他の十編の単編小説とともに単行本『髪』（平成12・1、新潮社）に収められる。本稿でもこの作品本文の引用はこの単行本による。）。「髪」は『源氏物語』の最後のヒロイン浮舟の出家をめぐる、彼女に関わった一人の阿闍梨の転落の生を描くものである。『源氏』現代語訳は、この「髪」と繋がりをもつ点で瀬戸内の新たな精神の境位を示すものとして意味を有する。以下瀬戸内の浮舟との関わりを確認することで、その内実を明らかにしていきたい。

## 二 阿闍梨の出走

瀬戸内寂聴の『源氏物語』訳について、説明のための加筆挿入ばかりでなく、訳者の思い入れが現れる場合があることを前述したが、そうした訳の中でも、「手習」巻（巻十）で浮舟が横川僧都に出家を許され剃髪を阿闍梨に委ねる件りは注目される。その記述を次に掲げる。

【】で括った箇所が原文に対して明らかな加筆と認め

られるところである。

「（中略）ここで一休みしてから、宮中へ参上しよう」と存じておりますが、しかしそんなにお急ぎになられるのでしたら、今日、授戒を務めさせていただきますようにとおっしゃるので、姫君は飛び立つほど嬉しく思いました。／（中略）

……この阿闍梨も、姫君の御発心をもっともなことを思います。それでも姫君が記帳のすき間からご自分のお手で外へかき出していらっしゃる御髪が、あまりにもつやつやと美しく、惜しいほどなので、【思わず見惚れて、】しばらく缺を持ったまま、【切るにしのびなく】ためらっているのです。た（中略）

こもき一人がお側にいて、少将の尼に、これこれですと知らせたものですから、少将の尼がうるたえてかけつけてみると、すでに僧都が、【授戒のしるしに】自分の衣や袈裟などを、形式ばかりにでもと、姫君にお着せ申し上げ【ています。急な御出家なので、姫君用の得度のお支度は何のご用意もなかったからでした。】／（中略）

姫君は、すぐにはとても叶えてもらえそうもなく、誰もが皆、思い止まるようにと言い聞かせておられた難しい出家の本望を、【何と】嬉しいことに、【今ついに】遂げたのだと思います。これだけは仏のおかげで叶えていただけたのだと思われて、生きていた甲斐があったと、【つくづく嬉しく】お思いにな

られるのです。

(二四八—二五〇ページ)

浮舟の美しい黒髪を切るにあたっての阿闍梨のためらい、そして一方で出家を遂げたときの浮舟の無上の解放感が原文に加えられている。昭和四十八年に平泉で出家得度した際の感慨が沸き上がりこのような書きぶりとなったものと想像される。原典に沿うことを自らに課しながらそれでもその枠から離れた訳を行ったのは、瀬戸内の人生の軌跡の中でその所以を解すべきものであろう。

右に示した記事のうち阿闍梨のためらいに対応する箇所は『源氏物語』(「手習」巻)本文で、

げにいみじかりし人の御有さまなれば、うつし人にては、世におはせむもうたてこそあらめと、この阿闍梨もことはりに思に、き丁の帷子のはころびより、御髪をかき出だし給つるが、いとあたらしくおかしげなるになむ、しばし銚をもてやすらひける。

(新日本古典文学大系本による。三六五頁)

とある。この記述では、阿闍梨が浮舟の様子からその出家を余儀ないものと感じた上で、一人の人間としての正常な感覚で若い女性の美しい髪を切ることの躊躇を示しているにすぎない。これが『女人源氏物語』では、

几帳の帷子のすきまから、わたくしは自分の長い髪をかきよせて、几帳の外の阿闍梨の方へさしだしました。一度では掌にあまる多い髪をかき出しかき出したしますと、さすがに人にもはめられた美しい自分の髪がほんの少しいとしくなって、胸が切な

くなったのを、あわててもみ消しました。

「こんな美しいもったいない御髪では、銚のためらいます」

ごくひくい声でしたが、阿闍梨のひとりごとが几帳越しに聞きとれたのは耳の迷いだったのでしょうか。(「夢浮橋」、小学館版による。二六一頁)

と描かれることになる。原典中の阿闍梨の黒髪を惜しむ思いが、『女人源氏物語』では浮舟を視点人物とするため、彼女自身がその剃髪を惜しむ心を抱くことになり、一方で彼女の髪を切る阿闍梨のためらいを彼から発せられた言葉として描いている。これは前述の瀬戸内の体験と重なる。そしてその言葉が阿闍梨より示されたことと、現代語訳で阿闍梨の躊躇の思いが明確化されたことを受けて、小説「髪」は、そのためらいを更に増幅し、髪 of 美しさに魅せられた彼の迷いとして肥大化させる。そして彼が自らの切った浮舟の髪を隠し持ち出奔する行為にも発展してゆくことになる。

小説「髪」では、始め横川僧都一行が宇治川畔で浮舟を発見したとき、阿闍梨は僧都の命で彼女を邸の中にかつぎ入れ、その濡れた衣服を脱がせ裸を見てしまう。阿闍梨はこの出来事から浮舟への思いを強め更に彼女の髪を切る場に居合わせて彼女への執着を決定的にし、切ったその髪を隠し持つことになる。次は「髪」の中で浮舟得度に際し、彼女の髪を切る場面である。

このお方はこうするしか方法はないのだと、ひと

り納得したつもりでいても、ふいに几帳の帷子のすき間から、御自身のお手でこちらへ向つてかき出してこられたお髪が、あまりにも豊かでつやつやと輝き、大きな生き物のように、どっと躍り出す勢いで、おのれの眼前に波打った時には、その媚めかしさとあでやかさに息も止まりそうになった。

あの夜、水に濡れそぼっていた髪を掬い上げたなまなましい感触が、手にも顔にも首にもよみがえつてきて、目の中に光がはじけるふうであった。思わず恍惚として、為すべきことも忘れはてた。しばらく見惚れて鋏を片手に茫然としていた。はっと吾に還つて、右手の鋏を持ち直し、左手で目の前にあふれのたうっている黒髪を、しっかりと掬い上げた。あの時の凍りついたような冷たさはなく、千筋の一本一本のすべてに血が通い、生命が宿っている温かさがあった。あの夜、目にも心にも軀の芯にも灼きついてしまった清浄の裸身が、目の奥に揺れた。

六尺に余る髪のなかばと思うあたりに鋏を入れた。髪はきちきちと哭き声をあげる。一筋ずつが身を固め合い思いがけない強い抵抗を見せた。その間にも髪の哭き声がむせぶように聞えてくる。天然の油を含むのか、髪は刃をすべり易く捕え難かった。いつの間にかおのれの額にじつとりと汗が滲んできた。

剪ったあふれる黒髪は、櫛宮にとつてい収めきれ

ない。残りの髪は用意の髪に包みこんで櫛宮の横に置いた。その時、誰の目もないのを確かめてから一握りの黒髪を別の紙に抱きこみ、素早くおのれの衣の懷にしのびこませた。(平成十年版单行本の本文による。以下同じ。二五一―二五二ページ)

傍線部は原典にその内容が記されるところで、それ以外は瀬戸内の独自の挿入である。ここでは切られる髪的美しさが、それに生命を宿っているかのように描き上げられてゐる。この後阿闍梨は浮舟に還俗を勧めた僧都の姿を権門薫におもねる姿と見て落胆し、また彼女の還俗を予想する。彼は権力の下の人間、恩愛の前の人間の弱さを、それぞれ僧都と浮舟に見たと思ったのである。その弱さと自らの弱さを呼応させて阿闍梨は出奔するのだが、観念の中で浮舟を我がものとし続けるためには出奔のほかに道はなかったのであらう。作品中では阿闍梨の迷いを促すものとして、浮舟にとりついたもののけが修行一途の僧のこの世に怨恨を残した故のものであったこと、ある若い僧が「魔羅断ち」を仕損ねて発狂し琵琶湖に自らの命を断つたことが記される。こうして阿闍梨は浮舟の髪を持って諸国をさまようが、その途上で僧都の死を聞いて帰京、その時浮舟の髪を持ち続ける自己を次のように捉えている。

あのお方への妄執を追づれに、どこの辺土に朽ち果てようと悔はないと、覚悟しての果しない流浪の歳月。どれほど苦しい時も、あの一房の黒髪を懷に

抱きしめている限り、生き耐えてこられたのだ。

(二五三〜二五四ページ)

阿闍梨はなおも浮舟の髪を持ち、彼女の官能の魅力に執って生きている。このように『源氏物語』本文を大きく変えて阿闍梨の迷いが描き出されているのである。

### 三 横川の僧都をめぐって

小説「髪」と原典の比較対照において明らかにされたのは、浮舟がもつ官能美に執する阿闍梨の姿である。妄執の中での阿闍梨の官能美への執着は観念化し、彼の生を支えるものとなる。こうした阿闍梨の造型と同時に、この作品では横川僧都・浮舟の造型が注目される。

阿闍梨は僧都の聖性を疑い、また浮舟が僧都の誘いに従って薫とともに愛欲の生活に戻ることを想像して出奔に踏み切るだが、二人はそれぞれ「髪」の中でいかに書かれているか。

まず僧都をめぐる記述を辿っていくと、始めに、

僧都は高德と験力の高きで都にも名の響いた聖僧であられたが、こよなく情味の深いお氣質で、肉親への思いやりも厚かった。出家にあるまじき人情と、陰でとかくそしるむきもあったが、お耳に入ったところで行に氣にとめぬ至っておおらかな御性格であられた。(二三五ページ)

とされる。この設定は原典に明確に見られないが、瀬戸内寂聴が原典を踏まえた以下の僧都の描写から導き出し

た固有のものといえる。僧都は母尼が初瀬詣での帰途宇治で発病したために山籠りを止めて宇治へ駆けつける。

母尼は僧都らの加持祈祷によって危機を脱するが、母尼を移した古い院で浮舟を発見することになる。弟子たちが彼女を狐の化身とするのに対し僧都は人間と見定め助けることを決意する。

これは真正正銘の人間だ。死にかかっているが命が絶えたわけでもない。余命がある間は、たとい一日、二日でも大切に守ってやらなければならぬ。折悪しく雨も降ってきたようだ。恐ろしい鬼神に取り憑かれたか、誰かに家を追われたか、だまされ捨てられたか、どっちみちこの女は、非業の死をとげねばならぬ運命だったと思われる。しかしこういう者は仏が必ず、お見捨てにならずお救い下さるはずなのだ。しばらく薬湯など飲ませたりして、助けるよう手を尽くしてみよう (二三七ページ)

この僧都の言のうち「恐ろしい鬼神に取り憑かれたか、お救い下さるはずなのだ。」は、『源氏物語』原文の「鬼にも神にもりようぜられ、人にをはれ、人にはかりこたれても、これ横さまの死にをすべきものにこそあんめれ、仏の必ず救ひ給ふべき際なり。」(「手習」巻三二八ページ)に対応したもののだが、文を短く切り浮舟が非業な死を遂げる運命を強調するものになっている。

更に僧都は、こうして小野に伴われた浮舟が日に日に衰弱する一方なのを見かねた彼の妹尼の懇願で小野に下

り浮舟のために修法を行う。弟子たちがその下山を反対するのに対し次のように言う。

拙僧は破戒無慚の法師で、戒律の中に破った戒も多いだろう。しかし女犯の戒についてだけは、まだ世間からとやかく後指さされたことがない。また真実、自分は女犯の過ちをつゆ犯したこともない。それなのに、齢六十を越えて今更に、世間から女色の件で非難を蒙ることがあれば、それも前世の因縁であろうよ  
(二四三ページ)

このような僧都が浮舟の願いを聞き入れて彼女を得度させ、阿闍梨に彼女の髪をおろすよう命じる。その僧都が「あろうことか」薫の依頼に応じて浮舟へ還俗を勧める手紙を送る。

大将どのに、あなたの御出家を、仏のお叱りをお受けになることに聞かされ、驚愕しております。そうした御関係なら、昔の御縁を取り戻して大将殿の愛執の罪を晴らしてさし上げなさい。一日でも出家すればその功德は量り知れないものがありますから、そうなくても仏を信じつつお頼りなさるよう

(二五三ページ)

この僧都の言葉の中の「一日でも出家すれば」以下の浮舟への示唆は、原文に「一日の出家の功德ははかりなきものなれば、なを頼ませ給へとなむ」(「夢浮橋」四〇二ページ)とあるものだが、これについて瀬戸内は「還俗して薫と添いとげ、薫の愛執の罪を晴らしてあげるよ

うに」(源氏のしおり)現代語訳巻末付載」と解説し、一貫して還俗勧奨の解をとる。

僧都が浮舟に還俗を勧めることについては、これによって阿闍梨が僧都の中に「仏へのうらぎり」を見、阿闍梨に狂奔を促すことになる点で意味を持つ。しかしその見方の誤りを阿闍梨は後に認めざるをえない。僧都はその時阿闍梨の想像したような矮小な人ではなかった。この作品の中で阿闍梨が最終的に捉える姿としては以下の記述がある。

長い歳月の流浪の中で、横川の僧都こそ、戒律を超えた広大な信仰の聖人、何ものにも捉われない自在無辺の高徳と慈悲の生菩薩という、有難い認識によりやく落着いてきた。  
(二五四ページ)

かつてその僧都は阿闍梨に煩惱の悩みを問われた時、「煩惱の中よりあげる凡夫の必死の念仏こそ、み仏の胸にまっ直届けられる」(二四七ページ)と答えている。ここには自らの弱さを知りつつ仏にすがり必死の思いで弱さと戦う僧都の姿が示されている。当時の僧としての常識を破る広やかで慈悲に満ちた姿を支えるものがこうした自らを厳しく律する心と仏への切実で真摯な信仰であった。瀬戸内の独自な人間把握といえよう。

ちなみに瀬戸内は『源氏物語の脇役たち』(平成12・

3、岩波書店)でも、この僧都について取り上げている。老母の急病に駆けつけるのも、得体の知れない正体もない女を助けるのも、僧都にとっては人の命を尊

く重く見るばかりの純粹さであり、目前に困った者があれば鳥獸であろうと差別なく救いの手を伸ばさず、にいられない僧都の優しさであり、その慈悲心は確固たる深い信仰の裏付けによるものである。

(一一三ページ)

これは『女人源氏』を経て「髪」において捉えた姿と相似の人間的特性を示す。瀬戸内は僧都の中に、人の命の尊さを感じる純粹さ、優しさを、その根底に仏への深い信仰を読みとっている。そしてその確かな信仰が「凡夫の必死の念仏」により支えられているものとして共感を抱いたのである。

阿闍梨の妄執を描く作品とはいえその世界が妙に明るい印象をもつのは、そのすぐ背後にこうした慈愛に満ちた僧都の存在がある故であろう。

四 浮舟像―『女人源氏物語』と「髪」―

一方浮舟も阿闍梨の予想に反し出家を全うする女性であった。ここで浮舟について見ると、阿闍梨が横川の僧都の死を聞いて陸奥の辺土から都に帰った後、彼女は

あのお方は還俗などなさらず見事出家を遂げきり、あれから五年後、流行病いで浄土へ清らかに旅立たれたとか。  
(二五四ページ)

と描かれ、出家の折の志を貫いて命を閉じたものとしている。

この生き方は、『女人源氏物語』の最終章「夢浮橋」

で出家したことを喜び迷いの中にいる薫を見下す浮舟の姿の延長にあるものと見なすことができる。浮舟は横川僧都の導きを得て出家がかない、その後薫に遣わされた小君という弟との対面を拒み通して、自らの生き方に思いを致す。その『女人源氏物語』の「夢浮橋」の章における浮舟をめぐる記述を掲げる。傍線を施した部分は『源氏物語』本文にその記事がみられるところである。

お経を読んでもひねもす経を写しても、空しい日は空しい想いに心が空白になることがあります。それでも、このうるさい好きにならない尼たちの中にまじって勤行している時、ふっと、山奥に湧く泉のような清冽なものが全身を流れる瞬間があるので。ああ、今、自分が潔められたと思うその瞬間には、またとない至福の想いに心がうるおされています。

薫さまのお手紙に対してどうしても、一言もお返事できなかったのはなぜなのか、わたくしにはわかりません。

けれども心が少しでも落ち着いた今になって想い返せば、お返事をしないよう、何かがわたくしを制してくれただのではないでしょう。そのほうがよかったのか、悪かったのか、わたくしにはわかりません。

けれども、すべてをみ仏にゆだねた今のわたくしは、自分の心に正直に従うことが、み仏のみに従



っているとされるのです。もしかしたら、あれもひとつの浮橋だったのではないでしょうか。男と女の間の恋もはかない浮橋なら、み仏に近づく橋も危うい浮橋で、油断したらいつふり落とされるかわからないか細い橋なのかもしれません。(中略)

小君のむなししい報告を受けてあの方はどんなお顔をなさったことやら。案外、量見のせまいところもあるお方なので、妙に気を廻して、こうまでかたくななのは、わたくしにかくし男でもできて、こっそりかくされているのではないかぐらいいの想像をしていらっしやらないともかぎりません。

あの方もこの方も、誰もすべてはみな、川の向この世界に住むはるかな昔の夢の中の人たちにすぎません。

これまで見えていたものが少しずつ見えなくなっていくにつれ、これまで見えなかったものが、ほのかにほのかに見えてくるような氣もしてまいります。次第に光を増すはるかな夜空の星のように。

#### 「夢浮橋」の章、二七八〜二七九頁

ここでの浮舟は、横川の僧都からの還俗の勧めを拒んで静謐の中で仏の慈悲を確信しつつそれにすがろうとしている。実際の原典の浮舟は猶迷いを脱しているとは言えないのだが、この『女人源氏』の最終部では、仏の知恵によって自らの生を透徹した目で見通す力を得ているのである。

このような浮舟の姿は『私の好きな古典の女たち』(新潮社、昭五七・二)の中にみられる浮舟把握と比べても格段の変化が認められる。

出家した浮舟が一向に心おだやかに暮らせもせずわずらわしい尼たちに囲まれているのも、出家とは、所詮こんなもので一挙に悟りなど開かれるわけもないし、それでも出家しない立場の人間にはどうしても理解の外のものが出家者の心には生まれていることを示しているような氣がします。そしてそれはこんな形で不親切に投げだす終り方で、読者のそれぞれの心に作者が波紋を投げかけているようにも思われてなりません。

格別聡明でも、思慮深くもなく、官能的で、情の深い浮舟のような女は、永遠に私たちのまわりにはたくさんいます。しかし自分の罪を罪と認め、これほど自分を責める女はそういないと思います。(以下略)

#### 「浮舟」(二四一頁)

『私の好きな古典の女たち』では自らの罪に深く悩む浮舟の姿に瀬戸内が魅力を感じているに過ぎない。このような浮舟に瀬戸内が心惹かれるのは、同じ書で、「しいていえば、私はとりすました女人や聡明すぎて難のないう人や、貞淑一辺倒の人より、嫉妬深かったり、もろかったり、男にだまされたり、情熱の制御出来ない愚かさを持った女の方に、親愛感を抱くし、なつかしい感じがするのです。」(『朧月夜』の条)と述べていることによ

り理解することができる。

こうした段階での浮舟への共感に対し、瀬戸内は出家を契機として浮舟に自らの思いを注入できる人格を見出し、『女人源氏』におけるような彼女の造型を行ったのであろう。現代語訳はそうした浮舟把握をそのまま生かしたものといえる。

そして小説「髪」は『女人源氏物語』以来の浮舟像を押し進めた形で描かれる。出家の際の仏に跪く意思を浮舟がその死まで持ち続けたことを、阿闍梨は彼女の髪を抱きながら知ることになる。そして阿闍梨は浮舟とは離れたところで「妄執の尽きせぬあかし」を生る力として持ち続けるのである。

## 五 瀬戸内における「乱調」と「髪」

このように僧都、浮舟の堅固な仏への帰依の姿を傍らに置きながら阿闍梨は髪を持って出奔した。そのように「髪」を書く意味は何か。

「髪」について水原紫苑氏は以下のような解説をされている。

凄絶な結末であるが、ここに救済がないかと言えばそんなことはあるまい。生きながら地獄に落ちたかに見える阿闍梨の妄執、その妄執が燃えきわまる果てには、玲瓏とした宇宙の姿がはるかに想像できるのである。その宇宙の姿はまた、浮舟の無垢な裸身に重ね合わさるものであってもいいのではない

か。<sup>8)</sup>

阿闍梨の姿の「凄絶」は瀬戸内寂聴が出家前に描いてきた女性たちの姿とも通じるものである。

瀬戸内は自らの好尚として、「どこかアンバランスで危なっかしいものや人や、作品が、なつかしく美しいと思えてくる。乱調のかなでる美には人間の世界の矛盾がみちみち、それだからこそ、この世や人がなつかしくもなるようである。／ 偽りの諧調に安住してなまぬるい生を送るよりは、乱調の美に身を投じ、地獄の火に焼かれる方が望ましい。生きるといふことも死ぬといふことも私には乱調の中にしか思い描けない。」（私の好きなことば（昭和46・8））と述べており、こうした生き方をする女性たちに共鳴しながら世俗の常識を越えて愛を貫く女性のロマンを形作ってきたわけだが、『私の好きな古典の女たち』の中での浮舟への親昵はこのような瀬戸内の思いの必然の姿であった。そして『女人源氏』で浮舟が出家しようとするとき、自分の生きてきた過去を仏に全て認められるものとして大切にかき抱き、安らかな心境に達していることは注目される。彼女はこれまでの自らの生を否定し捨てては行かない。瀬戸内がこのような造型をすることには彼女自身が自ら歩んできた生を意味あるものとして仏の慈悲の下に捉え、浮舟の生と重ねようとする意思を読みとることができる。

このように瀬戸内の中には「乱調」に傾く思いが生き続ける。かつてそこで燃焼する姿の美しさを描いてきた

彼女にとって、「乱調」は救済と相矛盾するものではなく、その延長に救済が控える形で確かな繋がりをもつものであった。

一方で瀬戸内は『源氏物語』現代語訳を通してそれぞれの女君をより客観の視座から見ることで彼女たちに寄り添うことができるようになったと思われる。

かつて瀬戸内は「あまり好きになれない」一人として紫上をあげていた『私の好きな古典の女たち』が、『女人源氏』で紫上の生の状況に入り込んだ後、現代語訳では彼女の死の場面で、その死を哀惜する言葉の書き入れている。このことには、その理想性にも同調できる心の広がりをおのこす過程で身につけるようになったものと解することができる。<sup>(10)</sup>

出家の後、自らの心のおのずからの発露として『女人源氏』を書いた後、転じて原典回歸する中で、自我の拘泥から脱し、仏の超越的立場により近い心境を確保した瀬戸内は、そこでの慈しみのまなざしがおのずから王朝の理想的人間像としての紫上の心境と融和することになったのではないか。連城三木彦氏の「穿ちすぎた見解かもしれないが、瀬戸内さんが『寂聴』としてひとびとから一つの理想として見られるようになって、初めて紫の上と同じ女を自分の中に見つけた気もする。」<sup>(11)</sup>という発言は、瀬戸内の今の心境を見通して示唆的である。

こうした瀬戸内の姿勢には『女人源氏』でそれぞれの女君に深く入り込み、それぞれに生を共有したことが前

提にあったことと思われる。

この間、瀬戸内は『源氏物語の脇役たち』を平成十二年三月に出版している（岩波書店）。そこでは彼女がこれまで取り上げたことのない物語中の脇役に照明をあて、それぞれの人物の生を丁寧に通ってその人物ならではの美点を見出している。以下にその指摘を掲げる。

○彼こそ何をしてもみな人にゆるされている最高の帝位につきながら、この人は痛々しいほど謙遜で、被虐的である。それはまた、冷静に自己を認識できる近代的な智性の持ち主ともいえる。（朱雀院）

○惟光はこの一件で、もしとがめを受けても、自分がどうなろうとかまうものかと、身を捨てたつもりで行動している。惟光の源氏への忠誠ぶりは純粹で打算がない。実にいい主従の関係である。（惟光）

○悪役に徹した大后の強烈な性格の悲劇が、鮮烈に心に残る。（弘徽殿の女御）

○形式主義で、気取り屋で、体面第一の貴族社会に迷いこんだ異分子として、近江の君の庶民性、素朴さ、単純さ、生命力の強さというものに、作者は応援しているようにさえ見える。（近江の君）

こうした形で瀬戸内は『源氏物語』の中の一人一人への理解を示し、作中女性を見るより高い境位を確保しているのである。

そしてそのような心境で自らが描き出してきた「乱調」を捉え直そうとしたのが「髪」ではなかったか。瀬戸内

は「髪」の阿闍梨の姿において自らの「乱調」を見つめる、より高次元に立つに至った。その迷いの生を否定するのではなく、おしみながら彼女において出家をあらためて意味づけようとしたのである。

## 六 他の瀬戸内作品との関わりから

出家から『源氏物語』現代語訳に至る瀬戸内寂聴の精神の軌跡については、彼女の創作との関連を考えることでその特徴がより明瞭になる。

例えば『愛死』（平成5・11・4〜6・9・5、「読売新聞」、単行本は平成6・11、講談社）の場合、自分がエイズと知った彰子は夫の昌平の前から失踪する。『源氏物語』の浮舟の失踪と重なる構図といえる。この作品は「乱調の愛」という点では以前の小説のモチーフを踏襲するものの、苦悩の果てに出家し、仏の慈悲のもとに自己の精神の安住の場を見出すという、『女人源氏』浮舟のモチーフを生かし、それが、薫を最後に放り出すような印象で終わっているのに対し、この作品では更に絶望を経た新たな歩み出しを彰子・昌平それぞれの「愛」の行為として描き出している。

『愛死』の中で、彰子の失踪のあと昌平は奈良の古仏を見巡る。法隆寺百済観音の前で若い日の彼が、観音の臉に涙を見、「自分の苦しみのすべてを観音が見通し、憐れみの涙を流してくれた」ことを感じる体験をした（第七章「古式の微笑」、講談社版単行本六七ページ）故で

あった。

昌平は薬師寺の本尊に威厳と慈悲の優しさを感じ、恍惚の思いの中でその優しさを彰子に及ぼそうとする。

昌平はそっとその場を離れた。誰もいなくなった本堂前の石だたみの広い庭を横ぎり、なつかしい東塔の方へ行き、その塔の陰から、まだ臉にありありと残っている薬師如来に向って深く頭を垂れた。

「彰子の病苦を何卒少しでもやわらげてやって下さい。彰子をお救い下さい。そのためには……」

昌平のは心の中となえていた祈りの言葉にぐっと詰った。自然な形でその時昌平の胸に浮び上がったのは、

「私の命と引きかえにして下さっても」

という言葉だった。「ああ、しあわせだ」と嘆息のようにつぶやいたあの老人のように、彰子は自分との結婚生活で、心の芯から、ああしあわせだと思ったことがあるのだろうか。

そう思ったとき、自分は彰子との結婚生活の幸福の中に、どれほどすっぱりと心身をゆだねきっていたかということに気がついた。

（同章八三〜八四ページ）  
更に法隆寺の玉虫厨子「捨身飼虎」の図に彰子への思いを昂揚させた昌平であったが、その後彼が高血圧で倒れたことを知って彼のもとに戻った彰子について次のような記述がある。

万一昌平が寝たつきりとか植物状態になってしまったらどうするか。そう思った瞬間、彰子は不安や恐れよりも一条の光りがすつと胸に差しこんできたような涼しさを感じた。思わず瞼を閉じ、その光りを確かめたいと思った。胸のあたりに、清水に洗われたいような清涼感が漂っている。

（第九章「菊枕」一九一頁）

『愛死』で瀬戸内は、理不尽な運命の下で、愛する人を支えることに生の意義を見出し、その運命を最後まで生き抜く形を提示する。そしてそれを見守る仏などのまなざしの存在を予想させる。そうした境地は『女人源氏』の浮舟の姿を受けたものであり、これと並行して『源氏物語』訳が進められていたことが推測される。

小説「髪」は単行本として短編集『髪』に収められている。『髪』所収の他の作品との絡みの中で「髪」を捉えることでその意味を明らかにすることができる。それぞれの短編は人生老晩に至った主人公が若き日を見つめ直す設定が多く、そうした境地に至った瀬戸内の想像力の所産といえる。その一編「幻」は、夫を含めかつて愛した男性たちや親しい女友達と死別していく女性（私）の姿を描いている。「私」の愛人の一人並木晶の通夜の彼の死に顔について、次のように描かれる。

通夜に行った時、すでに柩の中に収まっていた晶の顔を、柩の小さな窓の上から、わたしは怖れを持って覗きこんだ。信じられないほど美しい気品の高

い死顔が、目を閉じたまま花の中から静かに私を見上げていた。  
（単行本一〇二ページ）

この後「私」は晶の魂と逢うためトスカーナ行きの飛行機に乗る。「乱調」の生涯の果てに「私」はその体験した乱調の愛を反芻しつつ落ちついた清冽な心境を得るが、そうした心境は、瀬戸内が出家の後『源氏物語』と出会いその共鳴により描き得たものであろう。「風」は「藪の中」『今昔物語集』巻第二十九第二十三にある話）の主人公の女が瀬戸内とおぼしき女性作家の前で転落の生を語るものだが、そこで主人公の語りを聞く女性作家の融通無碍の姿こそ瀬戸内の至り着いた境地ではないか。地獄も極楽も超越して、愛に情熱を燃やし苦しむ人々を見つめ、その場に降り立ちその生をいとおしむ。このような境地に至った瀬戸内の精神の象りの一つとして「髪」も位置づけられる。ここでの阿闍梨の迷いはなおも続くが、彼に注がれる慈愛のまなざしはかつて浮舟がそれに浴したように確かに約束されている。「先生は、すべてを諦めるためではなく、すべてを受け入れるために出家なさったのではないかと。そこには茫漠とした優しさが広がり、諦観よりも、はるかに難しい世界があるように思えます。」とはこのような阿闍梨を造型する瀬戸内の精神の歩みを的確に捉えた言といえるのではないか。

「髪」は『女人源氏』や『源氏物語』現代語訳の路線を受けて浮舟・横川僧都など『源氏物語』の中の人間へ

の瀬戸内の共鳴のまなざしを示すとともに、「乱調」の生を描く彼女の作家的主体の軌跡を相対化しつつ広やかに捉え直し、調和の中に定位することを彼女に促す作品の一つといえる。このように捉えるとき瀬戸内作品に及ぼす『源氏物語』の意味をあらためて確認できるのである。

### 〔注〕

- (1) 『わたしの源氏物語』(平成元・7、小学館)。
- (2) 北村結花氏「いまどきの『源氏物語』―円地文子訳から瀬戸内寂聴訳へ―」(『国際文化学』創刊号、平成11・9)。
- (3) 「源氏物語の魅力を語る 瀬戸内寂聴」(『源氏研究』第三号、平成10・4)。なお河添房江氏は、この現代語訳が『源氏』ブームの火付け役として多様な『源氏』享受の形を導き出したこの現代語訳自体は「正典」化としての位置を占めているありようを指摘される(『正典化する現代語訳―源氏ルネッサンスの行方』『源氏研究』第八号、平成15・4)。
- (4) 『比較』には俊英が出家剃髪する場面(第三章)を以下のように描いている。傍線部は『女人源氏物語』の中の阿闍梨をめぐる描写と重なるところである。

着物や白布を通して尚、髪ぬくもりが、あたたかい毛布をまとったように肩と背を抱きつつむのが感じられた。思いがけず、熱いものが、軀の芯を強く貫いて走った。手足の先まで、何かがみなぎり今にもはりさけそうになった。俊子は深い息をして、その熱い棒のようなものを散らした。／理髪師が臆病に俊子の髪を

握り、／「もったいない」／と口の中で小さくつぶやいた。／「どうぞ、遠慮しないで剃って下さい。」

／俊子は目を閉じたままいった。

- (5) 水原紫苑氏は、薫の出現で僧都が浮舟に還俗を勧奨したことにより「阿闍梨と浮舟とその一握りの聖なる空間が犯されようとする」「そこで初めて阿闍梨は出奔するのだ」と述べられる(「宇宙による救済」『髪』平成14・8、新潮文庫解説)。
- (6) 早乙女利光氏の調査(「瀬戸内寂聴作『髪』と源氏本文の相違―小説『髪』の独自性について―」(早稲田大学教育学部『学術研究(国語国文学編)』第五十一号、平成15・2)では、黒髪のもつ呪性が阿闍梨を迷わせる点を強調されている。

- (7) 菊田茂男氏「東屋・浮舟・蜻蛉・手習・夢浮橋」(『源氏物語講座第四巻』昭和46・8、有精堂)など。
- (8) (5)に掲げた水原紫苑氏の解説。

- (9) 拙稿「瀬戸内寂聴『女人源氏物語』を中心とする『源氏物語』体験(『源氏物語』の受容―現代作家の場合―」平成10・11、新典社)参照。
- (10) 拙稿「日本古典文学の現代語訳―『源氏物語』の場合―」(『表現研究』平成13・10)参照。

- (11) 連城三木彦氏「解説」(集英社文庫版『女人源氏物語第二巻』)。
- (12) 山田詠美氏「解説」(集英社文庫版『女人源氏物語第四巻』)。